〈研究成果の紹介〉

高品質な東紀州地どり生産のための飼育形態の検討

畜産研究部中小家畜グループ

1．成果の内容

ブロイラー鶏肉とは一味違ったコクのある美味しい鶏肉を求める消費者ニーズに対応して、畜産研究部が開発した「東紀州地どり」は、東紀州地域で平成11年度から飼育が始まりました。現在の出荷羽数は1万羽で、専門料理店も熊野市や津市など県内に出現し、消費者から高い評価を得ています。今回、さらなる高品質化を検討するため、飼育密度及び休耕地を利用した放飼について、肥育効率や肉質などの検討を行いました。

試験は、28日齢までは平飼い開放鶏舎で通常の飼育を行い、29日齢以降は平飼い開放鶏舎で飼育密度が坪当たり30羽（平飼30羽区）と10羽（平飼30羽区）及び移動式簡易鶏舎（写真）にて坪当たり10羽（放飼10羽区）の3試験区で行いました。なお、給与飼料は各区とも同様としました。その結果、体重は放飼10羽区の雄で劣りましたが、その他は同等でした。一方、飼料要求率は飼料摂取量の少ない放飼10羽区が最も優れ、平飼30羽区、平飼10羽区の順でした。育成率は各区とも100%で、生産指数は各区とも70前後とほぼ同等でした。むね肉及びもも肉の肉色を色彩色差計を用いて測定したところ、明度・赤色度・黄色度とも各区に差はなく視覚的にも問題はありませんでした。むね肉を対象に肉の粘りの指標である伸展率を測定したところ、各区間に差はありませんでした。食味試験の結果では、放飼10羽区が好ましい傾向が認められました。

2．技術の適用効果と適用範囲

平飼い開放鶏舎では、飼育密度10羽/坪で飼育しても通常の30羽/坪と比べて増体重、飼料要求率、生産指数、肉色、肉質に差がなかったので、地鶏JAS規格も考慮に入れて30羽/坪を目安に飼育してください。また放飼では、雄の体重が他の試験区に比べ劣った反面、雑草を積極的に食して飼料摂取量が低減されたことから飼料要求率に優れています。また、食味試験では平飼区よりも評価が高く、消費者ニーズにあった自然な飼育方法であることから、「東紀州地どり」の品質向上及びさらなるイメージアップにつながる技術として活用できます。

3．普及・利用上の問題

放飼の場合は、カラスやイタチなどの外敵から鶏を守るために、上部は農業用シートや網で覆い、壁面は金網で囲い、敷地周囲にも金網を張り巡らす必要があります。なお、強風には弱いので風向に留意して設置し、緊急時には鶏を待避させる鶏舎が別途必要です。　（巽　俊彰）

表　飼育成績(98日齢)

区分	雄体重(g)	雌体重(g)	平均体重(g)	1日増体重(g)	1日飼料摂取量(g)	飼料要求率	育成率(%)	生産指数
平飼30羽区	2,700	1,926	2,330	23.36	78.80	3.37	100	70.55
平飼10羽区	2,720	1,941	2,330	23.37	80.10	3.42	100	69.52
放飼10羽区	2,458	1,978	2,211	22.15	72.42	3.27	100	68.99

写真　移動式簡易鶏舎